

青の山の教育

第37集



令和5年度

香川県立香川丸亀支援学校

はじめに

本誌『青の山の教育』第 37 集は令和4、5年度の教育実践であり、研究テーマは、児童生徒の「育ち」をつなぐ授業づくりです。授業実践の基になっているのは、令和3年1月に出された中央審議会の答申『令和の日本型学校教育』の①個別最適な学び、②協働的な学びです。

小学部は「個別最適な学び」に迫っています。各学年で児童の実態把握の仕方や友達を意識させるための教室環境の工夫等々とテーマを設定しました。これは答申にある「特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う」というところに繋がっています。

中学部は、テーマを仲間と協力し行動する生徒としました。まず教員全員で社会性に関する視点（集団ルールの把握、他者や自分自身と折り合いをつける等）を共通理解し、各学年団で生徒の課題を設定しました。この実践は「協働的な学び」に迫るものだと考えます。答申では、「探究的な学習や体験活動等を通じ、子ども同士で、あるいは多様な他者と協働しながら（以下略）」と書かれています。

高等部は、生きる力を育てるというテーマで学習内容の組み立て方や場所や場面の雰囲気等、教員自身が授業を振り返ったり、生徒自身が見て分かる自己評価を工夫したりと「個別最適な学び」の学習の個性化に取り組みました。学習の個性化とは子供の興味・関心、キャリア形成の方向性等に応じ、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身で学習が最適となるよう調整することができようになることです。

2年間、地道に積み上げた実践を整理してみると多くの気づきがありましたが、道半ばであることも実感しました。私たちの実践は、教員である限り、これからもずっと進んでいきます。

「青の山の教育」を一読していただき、私たちの次への飛躍のためのスプリングボードとするためにも、皆様からのご忌憚のない意見や感想を頂戴できたら幸いです。

令和6年3月

校 長 内山 宜子

I 研究の概要

本校では、令和4年度及び令和5年度の2年間、「児童生徒の『育ち』をつなぐ授業づくり」の全校研究テーマの下、実践に取り組んできた。ここに、2年間の研究の取組について報告する。

I 全校研究テーマについて

児童生徒の「育ち」をつなぐ授業づくり



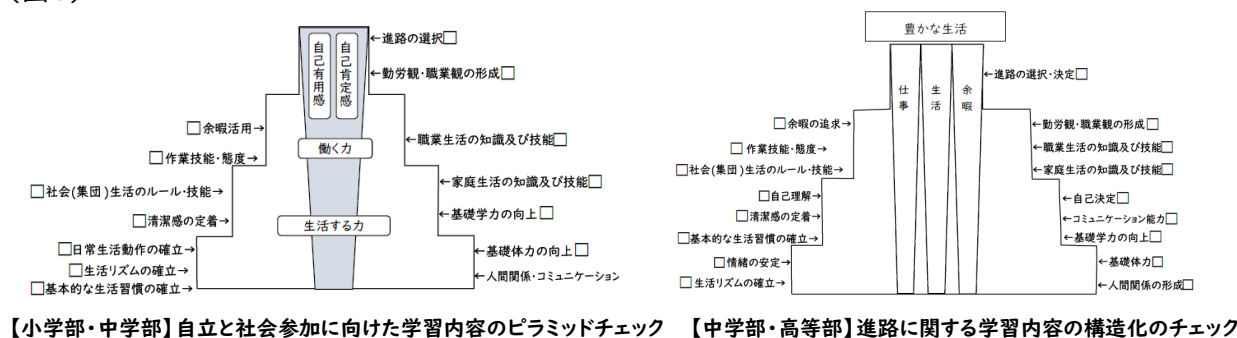
本校キャラクター
「まるちゃんす」

(1) 本校の育てたい力

本校では、「つながれた手と手で育てる丸養」の教育ビジョンのもと、「三つの部をつなぐ」「保護者となぐ」「地域となぐ」を学校全体で共有し、実践している。そして、児童生徒の自己肯定感（愛されること・ほめられること）や自己有用感（役に立つこと・必要とされること）を育てながら働く力や生活する力、余暇につなげる力を培い、キャリア教育の視点を意識した指導や支援を小学部から中学部、高等部、卒業後へとつないでいくことを目指している（図1）。

研究テーマは、全体や部での現職教育を通して上記のことを具現化するため2年計画で設定し、指導者の授業実践力の向上を目指した取組を進めている。

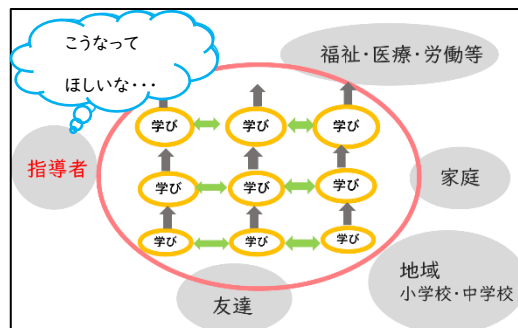
（図1）



(2) テーマ設定の理由

令和2年度から令和3年度の2年間では、研究テーマを「児童生徒の『学び』をつなぐ授業づくり」と設定し、研究を進めた。学びの連続性や学びの場の連続性、各教科等間の関連性などを「縦の学び」「横の学び」と捉え、これらの視点を踏まえた主体的・対話的で深い学びを目指した授業づくりに取り組んだ。その結果、幾つかの取組が有効であることが確認できたが、長期的な課題として継続して取り組んでいく必要があることも明確となった。

そこで、令和4年度からの研究テーマを、「児童生徒の『育ち』をつなぐ授業づくり」と設定した。令和3年度までの取組を踏まえつつ、各部や各学年の実態に応じた育てたい力とそのため必要とされる有効な指導や支援を検討し、実践、評価、改善を重ねながら児童生徒の学習活動の充実を図ることにした。



「育ち」をつなぐ構図

2 研究の進め方

(1) 各部の研究テーマ

各部の目標や目指す児童生徒像を基に、「育ち」をつなぐ授業づくりに取り組むため、部ごとに下記のテーマを設定し、研究を進めた。

<小学部> (年度ごとに各学年でテーマを設定した。)

<中学部> 社会性を育てる授業づくり～仲良く友達と協力し行動する生徒を目指して～

<高等部> 生きる力を育む授業づくり～仕事・生活・余暇の視点から～

(2) 授業研究

研究テーマの下、小学部3回、中学部3回、高等部2回の研究授業を行う。そのうち、各部1回を全校研究授業とする。

令和4年度

<全校研究授業>

回	日程	部・学年	教科・単元名
1	7月 4日	中学部1年	生活単元学習 「ぼくたち・わたしたちのSDGs～丸ようごみ調査隊～」
2	9月13日	高等部1年	家庭科 「快適な家庭生活について考えよう」
3	11月11日	小学部6年	生活単元学習 「いろいろなお仕事 ～『しらいカンパニー』でお仕事をしよう～」

<各部の研究授業について>

回	日程	部・学年	教科・単元名
1	5月31日	高等部 保健体育 Aグループ	保健体育科 「現代的なリズムのダンス」
2	10月19日	小学部2年	国語科・算数科 「いろいろバス」
3	10月26日	中学部2年	生活単元学習 「レベルアップ!～知って得するルールとマナー～」
4	11月 2日	小学部3年	生活単元学習 「秋祭りをしよう!」
5	11月22日	中学部3年	生活単元学習 「みんなでチャレンジ」

令和5年度

<全校研究授業>

回	日程	部・学年	教科・単元名
1	7月 5日	中学部2年	美術科 「ファッションショーにレッツトライ!～自分が輝く衣装を作ろう～」
2	10月 2日	高等部2年	職業科 「現場実習に向けて～働くために必要なこと～」
3	10月 6日	小学部3年	特別活動 「すすめ、がんばれ、キラキラ きっず」

<各部の研究授業について>

回	日程	部・学年	教科・単元名
1	5月30日	高等部2年	美術科 「名画の模写」
2	6月23日	中学部3年	職業・家庭科 「修学旅行の荷造りをしよう」
3	7月 5日	小学部5年	自立活動 「ファイトミッションをしよう」
4	9月26日	中学部1年	国語科 「伝え合おう ～あてっこゲームをしよう～」
5	10月30日	小学部2年	自立活動 「みんなで体操 やってみよう!」

① 研究授業について

全校研究授業と部別研究授業については、新型コロナウイルス感染予防をしつつ、全ての指導者が授業を見ることができるよう、直接参観とビデオ視聴での参観の両方を設定した。

ビデオ視聴に関しては、視聴時間を1週間ほど設けて放課後に放映し、指導者が授業の最初から最後まで見ることができるようにした。

授業参観後は、授業評価アンケートを授業者に提出し、授業改善や討議会に活用した。

② 授業評価アンケート

授業参観後に記入する授業評価アンケートは、各部や各学年で設定した研究テーマに沿った考察ができるように書式を工夫している。授業で見られた児童生徒の様子から、授業者が行った手立てについて気付いた点を記入し、授業者の意図や支援の方法について参観者も考えられるようにした。

授業評価アンケート

単元名() 授業者名() 記入者名()
 研究テーマ 部(年)テーマ「 」

●テーマに基づいて、授業のなかで児童生徒の様子と、そのために有効であった手立てについて授業評価をしてください。

児童生徒の様子	手立て ★教材教具★学習活動★言葉掛け★指導者の関わり方★評価の方法
例:A 君とB君はお互いに相手のいいところを探して伝え合っていた。笑顔で楽しそうだった。	・タブレット端末のアプリを上手に使っていた。 ・指導者が言葉掛けを減らし、カードや指さして支援。 ・A君が困ったときにT2が「～?」と言葉掛けをして気付けた。

授業者や授業 を行ったチームへひとこと	よかったところ	質問や次につながるアドバイスなど

③ 討議会の方法

授業説明では、学習のねらいや意図を理解するとともに、授業者から「育ち」をつなぐため、各部・各学年のテーマに基づいてどのような点を工夫したのかを聞き、有効な支援や活動について参加者全員で共有できるようにした。また、小グループに分かれて、設定されたテーマに基づく意見交換を行ったり、児童生徒の変容を追ったりすることで、授業の内容や支援の在り方について考えを深めた。

全校研究授業の討議会は部のテーマに沿った討議を行えるように、部ごとに実施した。他部の職員からの意見やアドバイスは授業評価アンケートで集約するようにし、授業改善に役立てた。討議会の結果を含めた各部の研究の成果は、まとめた全体現教として共有する時間を設けた。

(3) 研究集録作成

2年間の各部の研究実践を「青の山の教育」第37集として刊行する。

1 小学部の研究について

小学部では、全校の研究テーマ「児童生徒の『育ち』をつなぐ授業づくり」を受け、児童の「育ち」につながる視点を持ち、より授業づくりに生かすことができる研究を目指したテーマを年度ごとに各学年で設定した。そのテーマを基に、部別の現職教育の時間等を活用して学年ごとに授業づくりに取り組むこととした。

また、全校の研究テーマである「育ち」をつなぐ視点や各学年のテーマを踏まえて研究授業を実施し、討議会において、授業者が支援や教材、授業づくりについて説明を行うとともに、授業を通して感じた疑問について小グループで話し合い情報交換を行った。



2 令和4年度の研究

(1) 令和4年度小学部の取組について

【取組1】学年ごとの研究テーマに基づく授業づくり

部現教の時間を使って各学年に分かれ、テーマに基づく授業づくりを行った。

学年	研究テーマ
1年	実態把握をつなぐ
2年	人をつなげる 人とつながる学習活動
3年	みんなをつなぐ みんなでつなぐ
4年	児童にやさしい学習環境づくりにつながる実践
5年	コミュニケーションの力を育てる支援について～児童同士をつなぐ ICT の活用～
6年	中学部につなぐ～児童や指導者をつなぐ・実態把握をつなぐ～

【取組2】研究授業・討議会（本誌には全校研究授業の指導案・討議の記録を掲載）

部別研究授業を2回、全校研究授業を1回実施し、参観者に授業評価アンケートを記入してもらった。討議会では、授業者から各学年のテーマに基づく授業説明やアンケートの質問について回答を行い、小学部の指導者全員で検討できるようにした。(3)、(4)では全校研究授業として行った小学部6年生の指導案と討議の内容について紹介する。

また、各討議会後半では、授業者より以下のような情報交換のテーマを募り、意見交換をする機会を設けた。

	日程	科目	情報交換内容
部別研究授業	10月19日	国語科 算数科	国語科・算数科の集団授業における各学年の実施内容と課題について
	11月 2日	生活単元学習	年間を通して生活単元学習をつなぐためのアイデアについて
全校研究授業	11月11日	生活単元学習	

以上二つの取組をすすめるに当たり、部で行う現職教育は以下のような内容を実施した。

時期	内容
4月	全校・小学部の研究の概要について
5～9月	各学年で実施
10月	部別研究授業 討議会
11月	部別・全校研究授業 討議会
12月	各学年で実施
1月	研究のまとめ

3 令和5年度の研究

(1) 令和5年度小学部の取組について

【取組1】学年ごとの研究テーマに基づく授業づくり

学年	研究テーマ
1年	実態把握をつなぐ
2年	自立活動の目標を『育ち』につなげる学級づくり
3年	人をつなげる 人とつながる 環境づくり
4年	みんなをつなぐ みんなでつなぐ
5年	児童にやさしい学習環境づくりにつながる実践
6年	コミュニケーションの力を育てる支援について～中学部につなぐ支援について～

【取組2】研究授業・討議会

	日程	科目	情報交換内容
部別研究授業	7月 5日	自立活動	各学年での自立活動の実施方法・内容について
全校研究授業	10月 6日	特別活動	能力差のある集団における学習活動について
部別研究授業	10月30日	自立活動	集団の自立活動の個別目標について

以上二つの取組をすすめるに当たり、部で行う現職教育は以下のような内容を実施した。

時期	内容
4月	全校・小学部の研究の概要について
5・6月	各学年で実施
7月	部別研究授業 討議会・観点別評価について研修会
9月	進路に関する研修会（中学部と合同）
10月	全校研究授業 討議会
11・12月	各学年で実施
1月	研究のまとめ（各学年の実践発表）

I 中学部の研究について

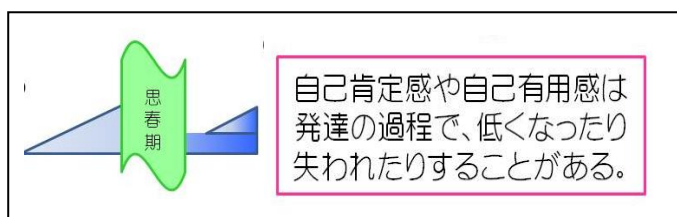
中学部のテーマ

「社会性を育てる授業づくり ～仲間と協力し行動する生徒を目指して～」

(I) 中学部のテーマ設定について

中学部は、集団への帰属意識が高まるとともに、人と比べたり自分自身に目を向けたりする時期であり、友達と自分を比べ、互いに認めたり自分を見つめ直したりすることは発達の過程で大切である。しかし、一時的に自己肯定感や自己有用感が低くなることがあると言われる時期でもあり、適切な支援や指導が必要とされる。

これまでの研究成果から、中学部の時期は、同じ目標に向かって一緒に頑張る仲間作りや助け合える仲間作りを通して、生徒一人一人の内面（自己肯定感・自己



有用感)を育てることが有効であることが確認できた。また、開かれた教育課程の実現が示されたことを受けて、本校の教育ビジョンに挙げられている、「つなぐ」をキーワードに、授業づくりや学習内容を整理する取組を行い、小学部や高等部との円滑な連携を目指した中学部の在り方について研究を進めてきた。

また、近年、生徒数の増加や生徒を取り巻く環境の変化による実態の多様化の現状を受け、これまで以上に実態把握と根拠に基づいた正確な支援や指導が必要とされている。中学部では、学習活動が教科担任制で行われており、生徒は、多くの指導者から支援や指導を受けながら学習活動に取り組んでいる。したがって、指導者には生徒一人一人の実態を再度見直し、支援や指導を共有し、全員でブレの少ない働き掛けをしていくことが求められる。

そこで、今年度の全体テーマに加え、中学部のテーマを上記に設定し、以下の2点を中心に据え、二年間継続して研究を進めることとした。

① 障害特性や社会性に関する要点整理

- ・中学部の支援・指導や障害特性について確認する
- ・各学級で「社会性を育むための実践記録」の計画、実践し、部で共有する

② 指導や支援の手掛かりを増やす取組とその共有

- ・各学年で検討した「生徒の実態・支援シート」を活用し、部で共有する
- ・ICT活用に関するワークショップの実施
- ・学習評価についての観点の共有と評価について確認する

次頁より、これらの取組を踏まえて実践した令和4年度と令和5年度の全校研究授業の様子について紹介する。

I 高等部の実践について

高等部のテーマ

生きる力を育む授業づくり ～仕事・生活・余暇の視点から～

(1) 高等部のテーマ設定について

「これからの社会は、予測困難な時代」とよく言われる。高校生においても、成年年齢が 18 歳に引き下げられ、在学中に選挙権が与えられるなど、社会がより身近になり、積極的な社会への関わりが求められる時代へと進んでいる。このような変化のなかで高等部の生徒たちには、今まで以上に物事に積極的に向き合うことや、他者と力を合わせて課題の解決を目指す姿勢が求められている。

しかし、本校の生徒は、生活経験の乏しさや、成功体験の少なさから自己肯定感、自己有用感が低い傾向が強い。そのため少しの失敗や注意にも意欲が失われたり、あきらめてしまったりする生徒や、対人関係が築きづらかったり、感情のコントロールが難しかったりする生徒も少なくない。またこの傾向は、卒業後においても、会社でのささいなトラブルをきっかけに、働く意欲が低下し、問題の解決や事態の收拾を図ることなく離職に至ってしまう、というケースにも深く関わっていると思われる。

このような現状から、高等部での学びをとおして、自分自身のことを理解したり、自信を育てたりすることで、積極的に社会と関わりながら生活し、目の前の問題を解決していこうとする生徒に育てていくことは重要な課題である。そしてこの課題は、高等部のめざす生徒像「自立・社会参加をめざし努力する生徒」と重なるものである。

そこで高等部では「生きる力を育む授業づくり」をテーマに設定し、進路指導の現場でも課題となっている自己肯定感と自己有用感を育てることでレジリエンス（困難をしなやかに乗り越え、回復する力）を身に付けるためには、生徒にとって、指導者にとって何が必要かを考えながら、実践を進めた。

(2) 実践の進め方

実践事例や授業実践では、高等部内で将来の生きる力の 3 本柱としている「仕事・生活・余暇」と、社会人として必要と考える項目「進路に関する学習指導内容の構造化」について、以下の①②に留意した。また、生徒たちの自己肯定感を高めるための取組としては、実践事例で③について考えた。

- ① 学習内容、指導内容が「仕事・生活・余暇」のどの部分につながるかを意識する。
- ② 授業内容について「進路に関する学習指導内容の構造化」の項目と照らし合わせ、授業でねらう力を確認し共有する。
- ③ 生徒の自己評価について考える。

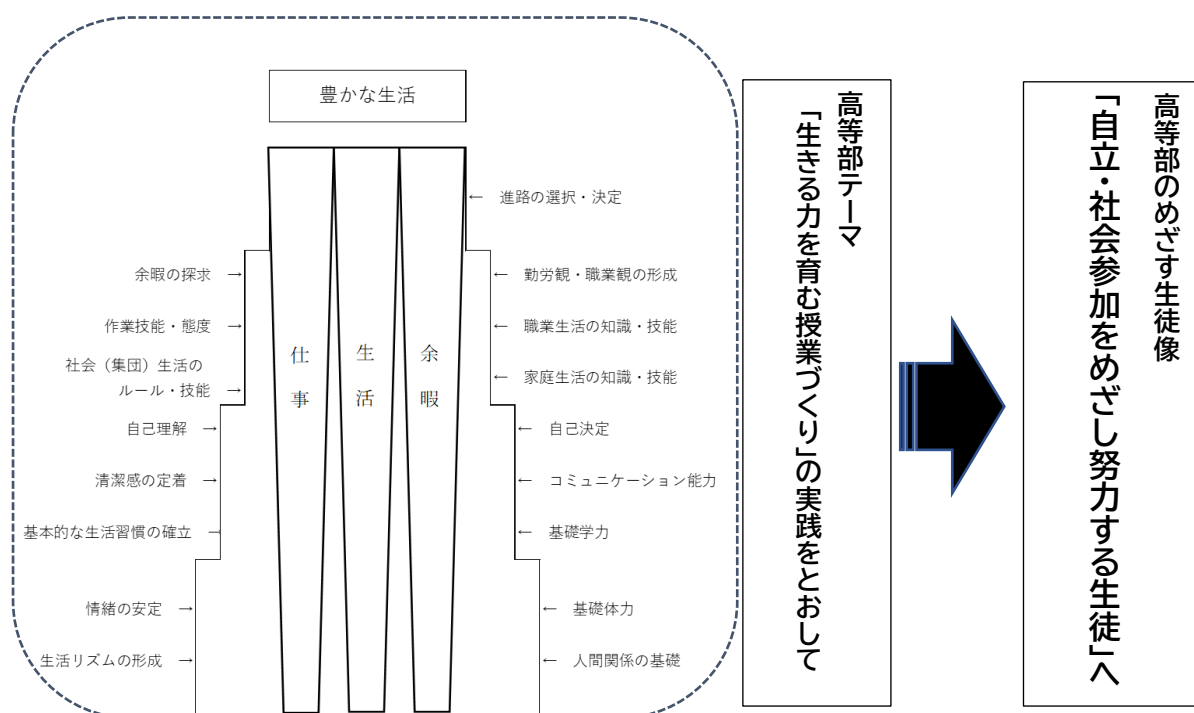
2 現職教育の取り組み

(1) 自己評価について

本校生徒に多く見られる自己肯定感の低さは、「できない」という経験が刷り込まれたことによる意欲の低下と、意欲の低下による経験不足の悪循環から生じていると思われる。具体的には、日々の繰り返される授業をとおして授業内容を理解できること、授業時間に楽しみを見出せること、生活のなかで役立てていけること、そしてその過程で変わっていく自分を見付けられることだろう。その第一歩は、生徒の授業への充実感と達成感に尽きると言える。そのため、実践をとおして、生徒が分かる具体的な目標設定と「生徒自身が分かる自己評価」について考えた。

(2) 学習内容と3本柱(仕事生活余暇)・進路に関する学習指導内容の構造化との関連

テーマである「生きる力を育む授業づくり」の実践をとおして、高等部のめざす生徒像「自立・社会参加をめざし努力する生徒」も見えてくると考える。これを実現するために、必要と考える指導の項目と、その関連については下の図に示すとおりである。



あとがき

令和4年度、令和5年度の2年間、「児童生徒の『育ち』をつなぐ授業づくり」のテーマのもと、全校で取り組んできた実践を、「青の山の教育」第37集としてまとめることができました。

平成30年度から2年間取り組んできた、「三つの部をつなぐ」実践の成果を引き継ぐとともに、新学習指導要領が令和2年から年次進行で実施されることを受け、令和2年度からの2年間は「児童生徒の『学び』をつなぐ授業づくり」をテーマに、主体的・対話的で深い学びの視点でこれまでの取組を振り返り、授業改善に取り組みました。そして、この2年間の取組の成果と課題を踏まえ、令和4年度からは「児童生徒の『育ち』をつなぐ授業づくり」を全体テーマとしています。なってほしい姿、本人がなりたい姿が同じ方向を向いた学習活動を進め、児童生徒の確かな育ちにつながる授業づくりを目指して、各部、各学年の段階や、児童生徒の実態に基づいたテーマを設定し実践に取り組みました。

小学部では、それぞれの学年ならではの「育ち」に着目したテーマを設定して取り組みました。どの学年の取組にも共通して丁寧な実態把握が行われており、指導者間で共有が図られていました。また、他学年の実践を知ることで、新たな発見や学びにつながりました。取組を通して、小学部として育ちをつなぐ授業とは何か、共通するポイントを見出すことができました。

中学部では「社会性を育てる授業づくり」をテーマに、目指す生徒像を「仲間と協力し行動する生徒」と設定して実践に取り組みました。障害特性についての研修を行い、生徒理解を深めるとともに、生徒の実態・支援シートを作成し、学年や学習グループで共有を図りました。改めて、社会性に関する要点についても共通理解を図りました。また、指導や支援の手がかりを増やす取組として、ICT 活用に関するワークショップを実施し、学習活動の充実につながりました。

高等部では、「生きる力を育む授業づくり～仕事・生活・余暇の視点から～」のテーマを継続し、自己肯定感と自己有用感を育む指導についての授業実践に取り組みました。学習内容や指導内容が、「仕事・生活・余暇」のどの部分につながるのか、進路に関する学習内容の構造化の項目との関連についてはどうかを確認することで、授業でのねらいを明確にすることができました。また、生徒による自己評価のあり方について研究を進めるうちに、指導者側の新たな気づきや課題の発見がありました。

今年度で「児童生徒の『育ち』をつなぐ授業づくり」をテーマとした研究は一区切りとなりますが、今後も引き続き取り組むべきことや、新たな課題が分かりました。第37集という冊数に象徴されるように、本校には創立当初から脈々と受け継がれてきた研究の歴史があります。「三つの部」「学び」「育ち」とつないできた我々の学び（成果と課題）を、また次の学びへとつないでいく所存です。

ぜひご一読いただき、本校の取組についてご指導、ご助言をいただければ幸いです。

令和6年3月

教 頭 合 田 育 代